防災アンケートから見た名古屋中学、高校の防災の分析結果報告

～助かる人から助ける人に～

2013年7月　名古屋高校生徒会・JRC 部防災フォーラムメンバー

0・はじめに

これは本年度（２０１３年）５月１日に名古屋高校・中学で行われた避難訓練の後、私たち防災委員が全生徒、全教員を対象に行ったアンケートの結果と分析です。有効回答数は中学４５３枚（在籍 748 名）　高校１１０３枚（在籍 1448 名）　教職員４１枚（常勤・嘱託在職数約１００名）でした。

この報告では、

１・アンケートの質問項目の設定意図について

２・アンケート結果とその分析

３・分析に対する対策の提言　と言う形で進めていきます。

このアンケートならびに、本分析については、愛知県教育委員会と名古屋大学の主催による「高大連携防災フォーラム」の一貫として行われております。本フォーラムは、愛知県下から選ばれた１０校近くの学校が、名古屋大学において、各専門家より夏季集中講義と演習を１週間受講した上で、それぞれの学校や生徒が、地域や自治体と連携しながら防災力向上を目指すアクションプランを制定し、その後の２年間でそのプランを実行してゆくものです。本校では生徒会とＪＲＣ部が協力して本フォーラムに参加し、昨年の文化祭でのシンポジウムをはじめ、これまでさまざまな活動を行ってきました。

1・アンケートの質問項目の設定意図について

まず、今回のアンケート（別紙参照）で聞いた質問項目とその設定意図について説明いたします。

質問１「学校にある避難器具の種類と場所を知っているか」については、非常時に使うことになる、避難器具の場所の位置を聞くことにより、防災設備に対する認知度を計るとともに、間接的に、防災に対しての意識を持っているかを調べます。

質問２「学校にある備蓄倉庫の存在と場所を知っているか」についても、質問１同様の意図で設定しました。

質問３「『お・は・し・も』は知っているか」は、質問５と意図がほとんど同じなので後述します。

質問４「家具固定をしているか」「避難袋があるか」「避難所の打ち合わせをしているか」については、家具固定・避難袋・避難所の打ち合わせという、「助けてもらう人」にならないための準備が各家庭でしっかりとできている人がどれぐらいいるか、そしてそのことを生徒が認識しているかということを調べるためのものです。

質問５「大災害の時に生存者のうちどれだけがレスキュー隊に助けられたか」、質問３とともに、災害時について、「助かる人」になるための知識を問うています。（完璧な正解はありませんが、阪神淡路大震災では一割というデータもあります。）

質問６「東海地区で起きた災害を３つまで挙げてください（記述式）」については、過去に東海地域で起こった災害に対しどのぐらいの知識があるか、またそれが全体的にどのような偏りがあるかを調べるものです。

質問７「本校付近で起こりうる災害を３つまで挙げてください（記述式）」は、質問６とは違い、そこからさらに絞り込みこの学校周辺で起きると予想される災害を調べ、どのようなことに対して危機感を持ち、想像ができているか、またそのその想像が適切であるかを調べました。

質問８－１「本校で行っている防災対策を挙げてください（記述式）」は、本校で具体的にはどのような防災

対策が行われているか、また、それがどれほど認識されているのかを調べました。

質問８－２「本校の防災対策は十分だと思うか」は学校での防災対策の充実度を聞いたものです。これに関してはかなり興味深いデータがとれたのでのちほど分析します。

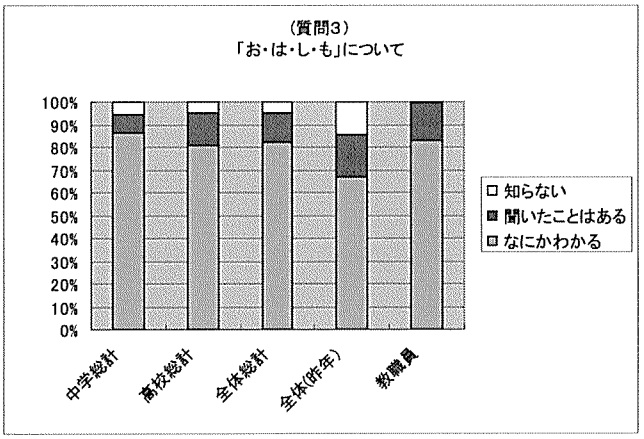
質問８－３「本校の防災対策で欠けている点はどこか（記述式）」８－４「本校の防災対策を良くするにはどうすればよいか（記述式）」は、質問８―２をふまえてどこがどのように欠けているのか、また改善するにはどうしたらいいかということの生徒、先生の声を聞くためのものです。同時に、この質問は記述式であるため、関心・意識の高さも知ることができます。

なお、質問１，２，３，４，５については去年（２０１２年）の９月にもアンケート（こちらは生徒のみ）を行ったので、それと比較をし、私たち「防災リーダー」の活動がどの程度生徒に影響を与えているかの調査も兼ねています。この説明をふまえて結果をまとめたグラフを用いながらそれに対する分析等をしていきます。

2・アンケート結果と分析

２－１生徒用アンケートまとめ

まず知識系の質問として「お・は・し・も」という言葉の意味（質問３）を知っている人は非常に多く、去年は７割弱、今年は８割強の人が”なにかわかる”と答えており、東海地方での過去に起こった災害（質問６）についても、記述されたものを見ると、どの学年も、伊勢湾台風（４７６名）・東海豪雨（２５７名）・濃尾地震（２２２名）を挙げた人が多く、全体としての数は十分ではないものの、東海地区を襲った代表的な災害を知識としては持っている人がある程度いることがわかります。



ところが、実際の避難訓練では、昨年同様「お・は・し・も」が実行できておらず、以下のような現象が見られました。以下の指摘は、当日避難訓練の様子を見てもらいました防災関係のNPOの方による分析です。

１：放送が入ったにも関わらす、机の下にもぐらないクラスが今回も２・３クラスあって残念でした。

２：多分もぐることが困難で、座り込んだクラスも頭を保護しない生徒がほとんどです。

３：廊下に出て避難準備中（順番待ち）も相変わらずおしゃべりをしている。

４：エントランスの階段から避難するのには時間がかかりすぎるのでは。

５：運動場まで避難したのに相変わらずだらだらとして、決められた場所までなかなかたどり着けないと同時に、誰一人として頭を保護していない。

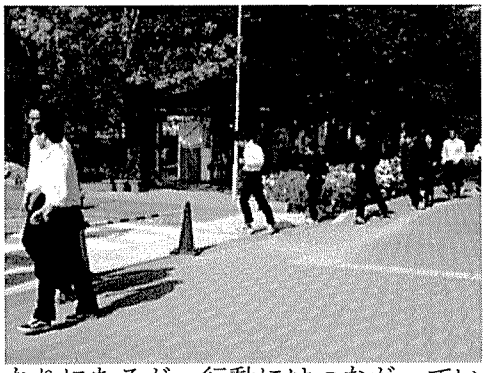
６：松葉杖の生徒さんに手を差し伸べてほしかったのに、誰もしない。

７：職員さんも必要最低限、事務所に残って参加されるとよかったです。

８：ある先生が建物から離れて避難するように言われていたが、落下物は建物の高さの距離だけ広がるので注意すること〔重要〕

９：全体にいえることは、先生・生徒共に緊迫感がない気がしました。

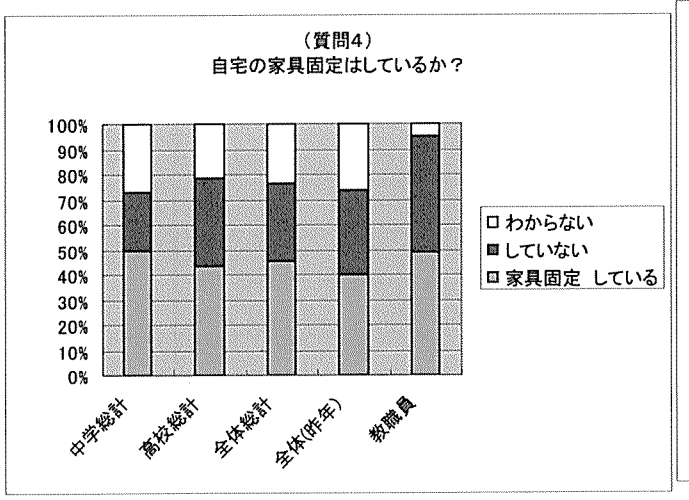
１０：抜き打ちで避難訓練をしてもパニックにならないような名古屋中学・高校生になられますように…

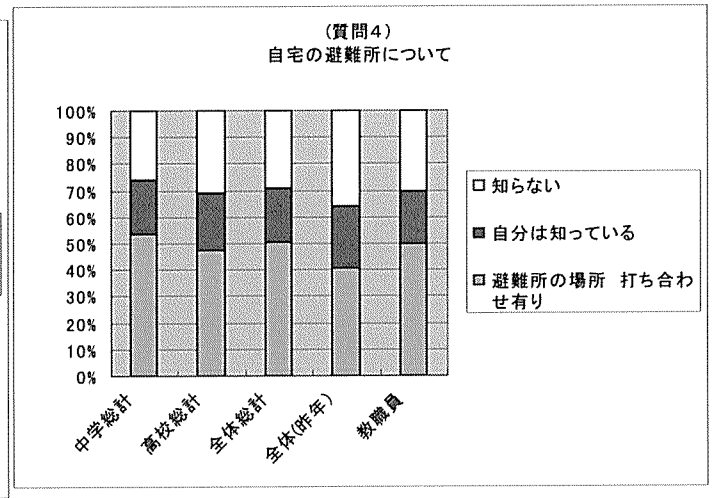


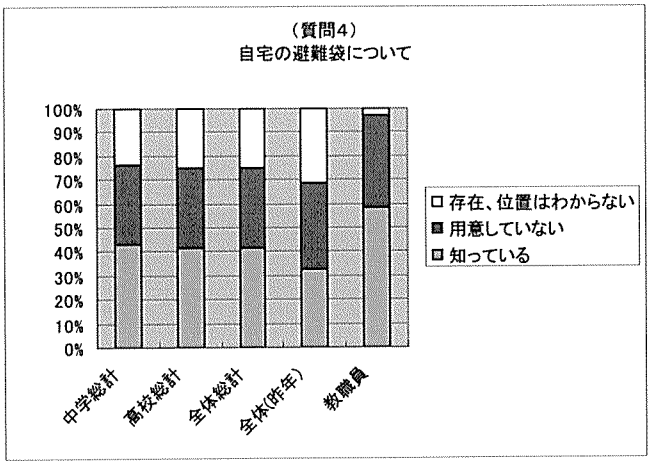
以上の指摘を踏まえてみると、つまり、本校生徒は一般的な知識はそれなりにあるが、行動にはつながっていないということがわかります。

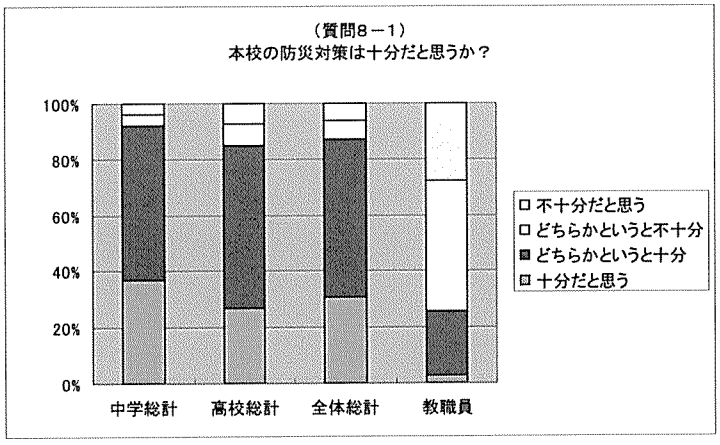
また、家庭での対策（質問４）についても、４～５割程度は「している」と認識していますが、それに対して、学校の避難器具の種類・場所の認識（質問１）では２０％しか、備蓄倉庫の位置の認識（質問２）では１０％しか認識していないという、極端に低いと言う結果がでました。家庭での防災に対する認識よりも通学している学校のそれの認識が低いということがわかります。

このように学校の防災対策の基本設備についてすら全く分かっていないのに、本校の防災対策について（質問８－１）８割の生徒がこの学校の防災対策に十分と答えるという、真逆の結果がでてしまっています。その上、学校が行っている防災対策について（質問８－２）記述できている生徒は２割程度あり、その８割の「十分」と答えた生徒の少なくとも半数以上が、現状の対策の認識が無いのに、「十分」と答えてしまっていることがわかります。また、不十分と答えた２割の生徒に関しても、本校での防災対策の自由記述（質問８－３及び８－４）



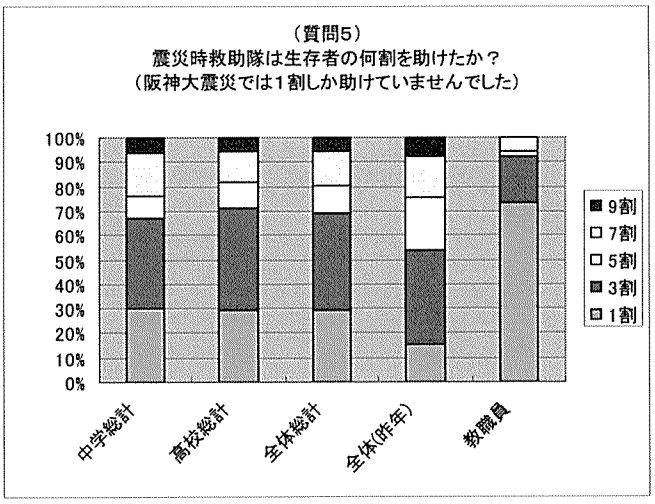






は殆ど書けていませんでした。

救助の認識に関しても、救助隊の割合の質問（質問５）は、去年と比べるとずいぶん良くなったものの、まだ現状と認識のズレがある状況です。



さらに先ほど東海地方での過去の災害（質問６）において、「記述されたもの」と申し上げましたが、半数以上の回答は無回答であり、学校周辺で起こりうる災害の予想記述（質問７）も地震、水害、などワンパターンで曖昧なものがほとんどであり、具体的に想像が出来ているとはいい難い状況でした。

このような結果を見るに、未だに生徒全体の、災害に対する知識不足だけでなく、それに対する想像力の乏しさ、そしてそのことを危険なこととして自覚していないことが問題としてあげられます　この、災害に対して想像できているとは思えない状況が、避難訓練の意識の低さや、弱者を放置する状況につながっていると考えられます。

２－２教員用アンケートまとめ

やはり生徒よりも先生方の方が、防災の知識を持ち、備蓄倉庫や防災器具の認識率も高いです。その中でも特筆すべきは学校の防災対策の充実度（質問８－２）でしょう。回答した方の約８割が防災対策が十分ではないという、同質問での生徒の回答とは真逆の答えがでています。ただ、これは良く言えば教員のほうがしっかりしていると言えますが、悪く言えば生徒との防災意識に大きなズレがあり、防災意識を伝えられていないということにもなるでしょう。

更に、先ほど教職員は生徒よりも防災の知識を持っていると書きましたが、それでも結果としてみれば、学校の避難器具や備蓄倉庫の認識をしているという割合は３割という低いものもでもありました。

さらに、意識の低さも問題として挙げられるでしょう。防災対策での問題部分（質問８－３）では「教職員自身の意識の低さ」が最も多かったのですが、先ほどの防災対策の充実度（質問８－２）で、、防災セミナーで学んだことからすると、現状の防災対策で十分とすることは考えにくいにもかかわらず、２割の方がこの現状で十分である・どちらかというと十分であると答えており、また、そもそも１００名近くの教職員に対して提出が４０枚という状況は､本アンケートの説明や配布・回収の仕方や防災フォーラムの認知度の低さもあるでしょうが、やはり根底の意識の低さを物語るものでしょう。

このような結果を見るに、意識、認識の乏しさが学校の防災意識の低さにつながっており、提出した先生の多くは「現状ではいけない」という意識を持ってはいるものの、現状の学校の防災設備の認識も十分ではなく、防災教育も充実しているとはいい難い中で、防災意識や知識が生徒と十分共有できていないのが問題してあげられます。

3結果を受けての対策の提言

以上のような現状のなか、それでは、今後、学校で起き得る災害を想像でき、被災時に迷わず動くことができるようになるにはどうしたらよいでしょうか。

先生方の案の中では、避難経路・校舎・器具・防災倉庫の内容・位置の見直し、浸水被害への対策というものがありました。もちろんこれらも大切な対策ではありますが、私たち防災セミナーでは、やはり防災教育と防災体験の充実ということを提案したいと思います。

まず、知識獲得を念頭に置いた授業、具体的には、例えば、海溝型地震と内陸型地震の仕組みや代表的災害、地下水や河川などの地形とそれがもたらす災害について、この東海地区や砂田橋周辺の様子を例にして、フィールドワークも混ぜながら、実際に授業に取り入れるすることを提案します。

また、定期的な防災に対する講演も大切だと考えています。「防災リーダー」は昨年度チャペルで発表を行いましたが、たった２０～３０分の１回の発表だけでも、例えば備蓄倉庫の認識（質問２）における「あることを知らない」率や「場所を知っている率は」改善しています。レスキュー隊の現状（質問５）や「お・は・し・も」の認識（質問３）といった知識に関することが改善されていることが、今回のアンケート結果からわかります。

次に、知識を定着させるという受け身的な姿勢だけでなく、実際に体験するという能動的な行動、避難所体験や避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）や防災マップづくり（ＤＩＧ）などを行事の一環として盛り込みことを提案します。実際に防災リーダーでは、この夏、８月後半に、ＮＰＯや名古屋市東区の協力のもと、本校での避難所宿泊体験を行い、上記ＨＵＧ・ＤＩＧもその中で行う予定です。

この体験も、より、実際に近い状態を感じることが大切であり、その点でも、避難訓練にも現実的な状況に近づけること、つまり抜き打ちで行うことや、授業時間内での避難訓練を提案します。避難訓練は今年は二学期に行う予定が無いようですが、是非ともこの授業時間内での避難訓練を行ってほしいと思います。意識の低さは、より正確な知識の獲得と体験によって改善されるものだと考えております。また、これらのことは、学内だけではなく、学外の有識者や自治体との協力が不可欠であることも付け加えておきます。

そして、最後に、生徒そのものが「助かる人」ではなく「助ける人」に、自主的に動ける“組織“をつくることを提案します。この学校は一次避難所にも指定されており、非常時には避難所になることが確実です。また、本校は遠方から通学している生徒も少なくなく、帰宅困難者が多くなることも予想されます。そのなかで、生徒は援助を待つ「助かる人」ではなく、援助をする「助ける人」になることが要求されます。そうなるためには、上から命令されて動くのではなく、自主的・自発的に動ける組織をつくることが必要なのです。防災リーダーは、これからも、自主ハザードマップ作成や現状のハザードマップ作成者への取材、根尾谷・阿寺断層見学、防災スタンプラリー、防災文庫設置など、様々な催しを通じて、生徒が自主的に動ける防災組織の設立に尽力してゆく予定です。

4・結びに代えて

災害とは常々言われていることですがいつ、どこで、どのくらいの規模で起こるか分からないものなのです。そして災害を無くすことは今の技術では不可能です。しかし、災害の被害を抑えるための工夫をすることは可能なのです。

だから、私たちはこの文章のサブタイトルであり、私たちの目標でもある「助かる人から助ける人へ」に近づくための１つの提案として、これを作成するに至りました。これを読んで少しでも災害に対する意識が芽生え、共に活動してくれる仲間が増えててくれれば幸いです。

ご拝読ありがとうございました。